

大学・大学院における通訳教育 ～学術的・教育的領域での現状・課題・将来性～

与那覇恵子

Interpretation Education at the university and graduate school level ～The problems, possibilities and present situation in the fields of academic research and education～

Keiko YONAHA

要 旨

本論は大学・大学院における通訳教育について、学術的及び教育的領域での過去、現在の状況に基づき、その課題と将来性を文献や日本通訳翻訳学会からの学会資料、通訳教育の被訓練者、訓練者としての筆者自身の経験を参照しながら調査・考察したものである。学術的領域を扱った第1章では、まず日本通訳翻訳学会の成立について述べた上で、2節で最近の論文タイトルから日本における通訳研究の現状を捉える。1章の3節、4節では国際的視点に立った学術的領域確立の歴史や通訳研究の現状についてそれぞれ述べている。教育的領域についての第2章では、1節から2節で日本及び海外の通訳者養成コースを持つ主な大学・大学院を挙げ、日本における通訳者養成クラスの語学レベルについて述べる。2章の3節では日本の大学における通訳教育の現状をクラスサイズや目標、内容、教材などの項目について述べた後、4節で語学力強化に利用されている通訳者養成のための技術についてその目的、効果を説明している。最終章では、学術的領域、教育的領域の各領域における課題を挙げその将来性を考察している。

キーワード : 通訳、学術的領域、教育的領域、課題、将来性

Abstract

This paper considers the problems, possibilities and present situation of interpretation education in both the fields of academic research and education by referring to literature, materials issued by JAIS (The Japan Association for Interpretation Studies), and the author's own experience as a trainee and a trainer in interpretation education. In the first chapter, dealing with the academic field, after a brief explanation of JAIS, the present situation of interpretation studies is grasped from the paper titles presented in academic conferences. In the third and fourth sections in the first chapter, the past and present situations of interpretation studies are described from the international viewpoint. In the second chapter, covering the educational field of interpretation, the first and second sections are about the universities which have interpretation courses and the level of language ability of interpreter candidates at Japanese professional schools for interpreters. In the third and fourth section in the second chapter, the present situation of interpretation education at Japanese universities and interpretation skills for developing language ability are described. It is the third chapter that deals with the problems and the possibilities of interpretation education in the fields of academic research and education.

Key words: Interpretation, Academic field, Educational field, Problems, Possibilities

はじめに

通訳者養成のための通訳技術を英語教育に取り入れるという動きが教育界で定着しつつあるようだ。全国英語教育学会 (JASELE) 大学英語教育学会 (JACET) 全国語学教育学会 (JALT) でもその実践報告や効果に関する研究発表を聞くようになり、中学・高校現場においてシャドーイングやフレーズ・リーディングを取り入れた授業をよく目にするようになった。筆者自身も10年程前高校現場に居た頃、語彙強化にクイック・リスポンズ、音声指導にシャドーイング、速い訳出にフレーズ・リーディングなど様々な通訳技術を英語の授業で取り入れていた。

では大学や大学院における専門教育としての通訳はどのような状況にあるのだろうか通訳の大学・大学院における過去、現在の状況を学術的領域、教育的領域の両側面から捉え、それぞれの課題や将来性について考察することが本論のねらいである。通訳関連の文献はもとより筆者自身の被訓練者 (trainee) としての学習体験や訓練者 (trainer) としての通訳教育の実践を参照しながら考察を進める。

1. 学術的領域における通訳

1-1. 日本通訳翻訳学会の設立と背景

筆者が実際に経験したことを挙げて通訳という分野が大学においてどう認識されているかを捉える糸口としたい。「英語教育をどうにかしなければ」と話す他学系の教員に「ディベートと通訳が英語力向上に有効である」と伝えたところ「アカデミックな科目とは何だとお考えか」と問われたことがあった。つまりディベートや通訳は学術的な科目ではなく、そのような科目が大学において必要かと問われたのである。2年前の第8回通訳翻訳学会に初参加し、その論文発表のレベルの高さやスピーディな討議の有り様に感銘を受けた筆者としては心外であったが、意外に未だ多数に共有された見解なのかもしれない。瀧沢 (2002) は述べている。「過去において大学などの高等教育機関から通訳養成は一種の『職人養成』で通訳は大学教育にはなじまない」とされ『通訳理論という言葉を使っただけで失笑がもれるというような事態 (近藤 1997)』が長く続いた。換言すれば、通訳養成・通訳研究は学問領域とは見なされず、民間教育機関で辛うじて生き延びてきたと言えるだろう。このため諸外国、特に欧米と比べ我が国の通訳研究は大幅に遅れているのが実情である。(瀧沢、2002、p.63)」

主要大学や大学院において通訳の専門教育コースを目にすることが多くなった現在でも近藤が指摘するような反応が帰ってくる背景には、日本通訳翻訳学会の歴史が

まだ浅いということも挙げられる。瀧沢 (2002) 及び日本通訳翻訳学会 (JAIS) ホームページによると、本学会の前身である日本通訳学会は、「通訳の理論と実践および教育に関する科学的・多面的研究を促進するとともに、この分野の社会的理解の増進に寄与すること」を目的に、2000年9月23日に設立されたとある。その母体となったのは1990年に近藤正臣 (大東文化大学経済学部教授)・水野的 (放送通訳者、元立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科特任教授) らを中心に出発した「通訳理論研究会」であり、その10周年を記念して2000年9月に発足、2002年9月に学術団体として認定・登録された。そして2008年9月、日本通訳翻訳学会と名称を変更、2009年から現在まで会長は鳥飼久美子 (同時通訳者、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授) である。年次大会/会員総会は毎年9月に開催され、学会活動は他に本部例会、関西支部例会、3つの分科会 (通訳教育分科会、コミュニティ通訳分科会、翻訳研究分科会) がそれぞれ年に数回開催される。会員は220名程で学会誌は『通訳研究』『通訳理論研究』である。(2011年8月20日取得)

確かに今年50周年を迎え平均会員数2600名の大学英語教育学会 JACET (The Japan Association of College) や今年37回目の大会を山形県で開催した会員数2500名の全国英語教育研究学会 JASELE (Japan Society of English Language Education)、そして今年36回目の年次大会を行う会員数3000名近くの全国語学教育学会 JALT (Japan Association for Language Teaching) などと比較しても、研究会としての歴史は浅く、学会としても小規模と言わざるを得なく、その認知度はこれからの活動にかかっていると見える。

1-2. 論文タイトルに見る研究テーマ

では、学術的領域における通訳の研究にはどのようなものがあるか、日本における通訳の学術的研究の概要をつかむため、1992年から2000年までの論文を取り挙げている『通訳理論研究』論集 (2004) や「通訳研究」アーカイブ、日本通訳翻訳学会年次大会における論文発表タイトルを発表者名と共に幾つか以下に挙げる。『通訳理論研究』論集では掲載論文を「理論的研究」と「教育訓練と評価」の2つに分けて掲載している。タイトルの順番は『通訳理論研究』論集に従っている。

I 理論的研究

Simultaneous Interpreting Research: Post, Present and Future. (1992)

Peter M. Davidson
Speech in Europe and Asia: Levels of Evaluation in Cross-Cultural Conference Interpretation. (1993) Robin Setton

Research into Tenor in Medical Interpreting. (1996) Helen Tebble

日本語における予測可能文末 (1994) Daniel Gile
同時通訳における処理単位について (1996)

舟山 仲地
Strategies in Simultaneous Interpretation: Anticipation (1999) Fred van Besien

日英同時通訳研究ノート (1995) 水野 的
「意味の理論」批判と通訳モデル (1997) 水野 的
日中サイト・トランスレーションにおけるセグメンテーションについて (1997) 揚 承淑

通訳者には編集が許されるのか：日本とオーストラリアの通訳原理の比較 (1996) Yoko Rinkerton
日英逐次通訳における情報の編集 (2000) 中村 志保・袖岡 久美子

II 教育訓練と評価

日本における通訳者教育の可能性—英語教育の動向をふまえて (1997) 鳥飼 久美子

日本における通訳者訓練の問題点と通訳訓練に必要な語学力の基準 (1996) 染谷 泰正
シャドーイングの有効性 (1992) 近藤 正臣
Consecutive Interpreting Test

— What we should evaluate and how we should evaluate — (1999)

Yoko Pinkerton & Tomoko Fringer

以上は『通訳理論研究』論集 (2004) によるが、以下に「通訳研究」のアーカイブから2004年以降の通訳の論文に絞ってそのタイトルと発表者を挙げる。(「理論的研究」と「教育訓練と評価」の分類は筆者による)

I 理論的研究

Conceptualization Processes in Simultaneous Interpretation (2004) Funayama Chuta
通訳における訳語選択の理論と実際 (2004)

鶴田・佐藤・河原
事例から見た通訳者の語用論アプローチ (2004) 渡辺 富栄

Roles of Interpreters in a Multilingual Multicultural Society-Perspectives on Interpretation: Experience of a Participant-Observer, 1939~2005 (2006)

Etilvia Arjona-Tseng
訳出遅延時間と訳出開始タイミングに着目した同時通訳者の原発話追従ストラテジーに関する分析 (2006) 遠山 仁美・松原 茂樹

英日同時通訳者発話におけるフィラーの出現と聴きやすさとの関係 (2007) 遠山 仁美・松原 茂樹

大規模音声コーパスを用いた日英・英日同時通訳における訳出遅延の比較分析 (2007)

小野 貴博・遠山 仁美・松原 茂樹
逐次通訳におけるスピーチ理解の認知プロセス：ESIT 日本語セクション訓練生の認知スキル習得について (2007) ベルジュロ 伊藤 宏美

Diplomatic Interpreters in Post-World War II Japan: Voices of the Invisible Presence in Foreign Relations (2007)

Kumiko Machida Torikai

II 教育訓練と評価

「通訳訓練法」を利用した大学での英語教育の実際と問題点 (2004) 田中 深雪
通訳教育の新しいパラダイム～異文化コミュニケーションの視点に立った通訳教育のための試論～ (2005) 稻生 衣代・染谷 泰正

大学院における医療通訳教育とその課題～大阪外国語大学大学院の取り組みからの考察～ (2006)

堀 朋子

「理論的研究」に比べ「教育訓練と評価」は実践報告や調査報告となっている場合が多かったため、論文件数としては少なくなっている。

2007年に筆者が参加し感銘を受けた日本通訳学会第8回年次大会での参加者は学会報告によると延べ250名を超え、会場でのアンケート調査結果によると93%の回答者が「満足した」「大変満足した」と答えたとのことである。発表件数は20本で、翻訳を除いた通訳に関する発表タイトルは以下の通りである。『通訳理論研究』論集に習い、筆者が「理論的研究」と「教育訓練と評価」の2つに分類した。『通訳理論研究』論集でもその傾向があったが、理論的研究では、同時通訳に関する研究が多い。

I 理論的研究

“Many Shadowings” Model 本條 勝彦
日英同時通訳における品詞転換 鈴木 憲之
日英同時通訳における方略分類のための試論

石塚 浩之
英日同時通訳における表層記憶の喪失

関口 洋平
焦点連鎖と訳出の語順 河原 満志
大規模音声コーパスを用いた日英・英日同時通訳における訳出遅延の比較分析 小野・遠山・松原
通訳記録の分析から通訳研究へ 舟山 仲地

II 教育訓練と評価

東京外国語大学における日英通訳指導について

鶴田 知佳子・光藤 京子
異文化コミュニケーション能力の修得プロセス
～通訳演習参加者の事例より～ 新崎 隆子
単一事例デザインによる自己記録を用いた文字通
訳訓練の効果の検討 吉岡 昌子
台湾の中日通訳翻訳教育について ～教育機関別
の現状と将来～ 丁 紀祥
北京語言大学中日同時通訳修士課程における通訳
実習の特徴と課題 岩本 明美
通訳教育に関するアンケート調査中間報告
代表 田中 深雪

よる自己調整学習の確立にむけて～その実践例と
今後の課題～ 大西 比佐代 (神戸女学院大学)
大学学部生対象の通訳授業の意義
内藤 能 (近畿大学)
通訳と英語学習—英語教育への貢献を目指して—
小松 達也 (国際教養大学)
司法通訳翻訳教育の試み—立命館孔子学院の事例
紹介— 吉田 慶子 (立命館大学)

今年、2011年7月2日に名桜大学において「日本国際
文化学会 第10回全国大会」が開催されたが、日本通訳
翻訳学会からも2名の発表者があった。司会者として拝
聴した筆者の印象では、他の発表と比較しても彼らの発
表は質的レベルが高く満足感の得られるものであった。
タイトル及び発表者は次のとおりで、2件とも異文化コ
ミュニケーションに関する論文である。

字幕翻訳における文化的要素の翻訳戦略—
河原 清司 (立教大学大学院異文化コミュ
ニケーション研究科博士後期課程)
要通訳裁判での訳出における異文化問題と裁判員
への影響について
水野 真木子 (金城学院大学 文学部教授)

全体として論文タイトルに見る研究テーマにおいては、
「理論的研究」の方が「教育訓練と評価」よりも数が多
く、(それは教育訓練と評価の場合は実践や調査報告と
なる場合が多いことによるものとも考えられるが)「理
論的研究」の中では逐次よりも同時通訳に関する論文が
多い。やはり、初期の頃は通訳を概略的に捉えた論文が
多く、徐々に具体的テーマに絞られてきている。最近に
なって登場してきた分野としては、法廷通訳やコミュニ
ティ通訳の分野、そして通訳における異文化理解の分野
などが挙げられる。

1-3. 学術的領域確立の歴史

日本においてどのような研究が通訳という学問領域で
なされてきているかについては、前節で挙げた昨今の論
文発表タイトルにその概要をつかむことができるが、こ
こでは国際的に通訳研究が専門的学問領域として成立し
ていったその背景を検証する。

鳥飼 (2007) は通訳研究に関して、「ヨーロッパでは
1950年代に始まっており当初は同時通訳の情報処理メ
カニズムを認知心理学的観点から分析するものが主流で
あった (Pochhacker, 1998)。近年は、例えば通訳にお
ける非言語コミュニケーションの影響についての研究
(Poyatos, 1987)、ボライトネス理論や関連性理論など
語用論の知見を取り入れた分析 (Hickey 1998; Gutt 1

最新の第12回年次大会は2011年9月10日から11日ま
での日程で神戸大学において開催されており、発表件数は
28本 (ポスター発表2本) であるが翻訳を除き通訳に関
する発表のみを以下に示す (分類は筆者による)。今年
は3月11日に発生した東北大震災の後ということもあり
災害時多言語情報支援に関する発表もあったことが目を
引く。又、教育訓練の領域で司法通訳翻訳教育の事例紹
介が登場している。

I 理論的研究

オーラルヒストリー・インタビューから見る日中
通訳者の規範形成

平塚 ゆかり (立教大学大学院異文化コミュ
ニケーション研究科D)

日英同時通訳における英語産出のための処理につ
いての考察

是恒 孝子 (神戸女学院大学大学院研究生)
Bio-linguistics and Creative Interpreting
Kensuke Yoshimura (Chuo University)

関連性理論と通訳翻訳 ～TILTの観点から～

染谷 泰正 (関西大学)

通訳・翻訳活動を通じた災害時多言語情報支援の
考察 内藤 稔 (東京外国語大学)

対人援助場面のコミュニティ通訳における『通訳
の逸脱行為』の分析とコミュニケーション効果に
ついての研究

飯田 奈美子 (立命館大学大学院先端総合
学術研究科D)

Six Techniques for Enhancing Japanese to
English Machine Translations

June-ko Matsui, David Magnusson (Meikai
University)

多文化共生施策に伴う多言語情報の政策的課題

山本 一晴 (大阪大学大学院人間科学研究科D)

II 教育訓練と評価

通訳関連授業における循環型実習タスクの導入に

991等)、社会学や言語人類学的アプローチにより通訳者の役割を分析した研究 (Mason, 2001等) などが出ている」¹⁾ と大まかに解説している。

日本でも通訳関連のテーマでの卒論を提出する学生も増え、博士論文も目にするようになってきた昨今だが、フランツ・ポエヒハッカー (2004) によれば、初の修士論文はパネス (Paneth, 1957) がロンドン大学に提出した。通訳実践とヨーロッパ通訳学校の訓練メソッドの双方に関する観察データを収集したものであった。1960年代には専門職確立へ向けた研究が主に欧州で、又、日本でも (福井・浅野, 1961) 出版される。実験心理学の領域では、1965年にオレロン (Oleron) が同時通訳に関する初めての実験研究を行い、観察と実験によって得たデータを基に、原発話と通訳のアウトプットとの間に生じる訳出の遅れ (decalage) を測定した。

初めての博士論文はバリク (Barik) がノースキャロライナ大学に1969年に提出したもので、実験で誘発された通訳データの誤りのタイプに着目、質的、言語的特徴から休止 (pause) や時間的遅れ (time lag) などを定量的・時間的特徴から分析した。又、同じ1969年、ピンター (Pinter) が博士論文をウィーン大学に提出、練習を通して聞くこと話すことを同時に行う技術を習得する可能性を論じている。ガーバー (Gerver) は1971年オックスフォード大学に提出した博士論文で、ノイズの影響とインプットのスピード、そして通訳者のパフォーマンスについての実験結果を基に、初の同時通訳情報処理モデルを示している。このガーバーがベネチアで共催した通訳研究に関する学術的シンポジウムの発表論文集 (Gerver and Sinaiko, 1978) を、フランツ (2004) は高く評価し通訳学における最重要の古典であるとしている。

1970年代に通訳研究は幾つかの学派に分かれたが、カーデ (通訳を言語学とコミュニケーション理論から解明しようとしたライブツィヒ学派)、チェルノフ (心理言語学中心のソビエト学派)、セレスコヴィッチ (言葉よりメッセージの内容だけを保持する『意味の理論』を主張するパリ学派) などが、通訳研究者かつ教育者として、通訳を大学教育に位置づけ数多くの通訳に関する博士論文を生み出す土壌をつくる。鳥飼が (2007) の中で初期の通訳研究で重要としているセレスコヴィッチの「意味の理論」であるが、それが科学的裏付けに欠けると批判され、より実証的な通訳研究を展開することが課題とされたのが、1986年末トリエステ大学で開催された会議通訳訓練に関する国際シンポジウムである。その後トリエステ大学は通訳の神経言語学的基盤に対する学際的アプローチと“The Interpreters’ News letter”の発行により、実証研究、特に神経心理学やテキスト言語学系研究の中核となった。

しかしながら、その段階でも通訳が独自の学術領域と見なされる状況であるとは言えなかったとされ、1992年にウィーン大学で開催された Translation Studies Congress 以降にジルの「通訳学」(Gile, 1994) が学術領域に登場してくる。その影響のもと、日本で近藤正臣や水野的が通訳理論研究会を創立、「通訳理論研究誌」を年2回発行し、2000年には日本通訳学会 (JAIS) を正式発足、学術誌の名称も「通訳研究 Interpretation Studies」と改められた。

1-4. 通訳研究の内容

Davidson (1992) はここ10~15年の間に通訳研究は飛躍的に伸びていると指摘、その理由として会議通訳が職業として確立されたことと、高等教育機関において通訳専門分野での学士号や修士号が取得できる大学や大学院が急増したこと (日本は例外) を挙げている。その研究分野は、カナダのモントリオール大学での通訳者ジャーナル“Meta”やイタリアのトリエステ大学の“The Interpreters’ News letter”、アメリカのジョージタウン大学の“The Jerome Quarterly”などの出版によって多岐に広がりを見せており、ヨーロッパの通訳者養成コースのある大学では研究論文が定期的に出版されている。多岐に及ぶ分野の中で、Davidson は特に通訳者の訓練方法、評価方法、テクニカル通訳、法廷・コミュニティ通訳、通訳の言語学的側面、通訳者の役割、通訳の認知的側面などについて言及している。以下に特に大学・大学院での教育に関連性が高いと筆者が考える項目、訓練法、評価法、通訳の言語学的側面や認知的側面に絞って要約する。

1) 通訳者訓練法

通訳研究分野の中でも急成長している分野の1つで、これまでは殆ど研究されてこなかった分野であると述べられている。(以下、英文の和訳は筆者によるものである。) 1989年に Laura Gram と John Dodds が出版した“The Theoretical and Practical Aspects of Teaching Interpretation” (通訳教育の理論的、実用的側面) には、逐次通訳の文法や逐次通訳教育の問題、言語の神経学的基礎、通訳プロセス理解の重要性、会議通訳や科学・専門会議通訳のための学生教育など様々なテーマでの論文が掲載されている。セレスコヴィッチは1989年“Teaching Conference Interpreting” (会議通訳教育) を、ジルは1990年“Communication and Quality in Conference Interpretation” (会議通訳におけるコミュニケーションと質) “Processing Capacity and Time in Speech Comprehension and Production” (スピーチの理解と生成における理解力と語尾喪失の処理) などを発表した。この分野で議論の焦点となっているのはシャドー

イングの役割についてで、Nancy Schweda-Nicholson は“The Role of Shadowing in Interpreter Training” (通訳者訓練におけるシャドーイングの役割1990) でそのあたりの議論についてまとめている。

2) 評価法

評価の必要性については論じられても評価の適切性、特に目標達成のための評価の適切性について議論されてこなかったが、今や多くの大学から注目を集めている分野で経験的研究が多いとされている。1984年に David Gerver, Patricia Longley, John Long, Sylvie Lambert が協同で“Selecting Trainee Conference Interpreters: a Preliminary Study” (会議通訳研修生の選抜：予備調査) と題する論文を書き、5年後に“Selection Tests for Trainee Conference Interpreters” (会議通訳研修生選抜試験) を出している。Sylvie Lambert は“Aptitude Testing for Simultaneous Interpretation at the University Ottawa” (オタワ大学における同時通訳適正試験) の2つの論文を1991年1992年に書いており、他に Nancy Schweda-Nicholson の“Screening Interpretation Candidates at Delaware: A Comparative Study” (デラウェア大学における通訳受験者の選考：比較研究1986) や Barbara Moser-Mercer の“Screening Potential Interpreters” (潜在能力の高い通訳受験者の選考1985) がある。

3) 通訳の言語学的側面

応用言語学者、社会言語学者、心理言語学者などの通訳の分野での貢献度は高いとされる。その中に日本の Hiromichi Uchiyama の2つの論文“Problems Caused by Word Order when Interpreting/Translating from English into Japanese: The Effect of the Use of Inanimate Subjects in English” (英日通訳・翻訳における語順が引き起こす問題：英語の無生物主語使用の影響 1991) と“The Effect of Syntactic Differences on English-Japanese Interpreting: Pre-modifying Adjectives in English” (英日通訳における構文上の違いの影響：英語における前置修飾形容詞 1992) がある。その他 Sandra Gallina の“Cohesion and Systematic Functional Approach to Test: Applications to Political Speeches and Significance for Simultaneous Interpretation” (結束性と試験への系統的機能的アプローチ：政治演説への応用と同時通訳での重要性 1992) が挙げられている。

4) 通訳の認知的側面

認知的、神経学的側面からの研究は活発で研究テーマも広範囲に及ぶとされる。例えば Sylvie Lambert の“Simultaneous Interpreters: One Ear May be Better

Than Two” (同時通訳：1つの耳は2つの耳より良いかもしれない 1989) や Valeria Daro の“The role of Memory and Attention in Simultaneous Interpretation” (同時通訳における記憶と集中度の役割 1989) などがある。以下、論文タイトルと著者名のみを列挙する。

- Manrizio Viezzi “Information Retention as a Parameter for the Comparison of Sight Translation and Simultaneous Interpretation: An Experimental Study” サイト・トランスレーションと同時通訳の比較媒介変数としての情報保持: 実験研究 1989
- Mike Dillinger “Comprehension During Interpreting: What Do Interpreters Know That Bilinguals Don't?” 通訳時の理解力：バイリンガルが知らなくて通訳者が知っていることは？ 1990
- Edith Spiler-Bosaturo & Valeria Daro “Delayed Auditory Feedback Effects on Simultaneous Interpreters” 同時通訳における耳によるフィードバックの遅れによる影響
- Peter Davidson “Segmentation of Japanese Source Language Discourse in Simultaneous Interpretation” (同時通訳における日本語談話セグメンテーション 1992)
- Jennifer Mackintosh “The Kintsch and Van Dijk Model of Discourse Comprehension and Production Applied to the Interpretation Process” (通訳プロセスに応用される Kintsch Van Dijk 談話理解再生モデル 1985)
- Daniel Gile “Le MOdele d'Effort et l'Equilibre d'Interpretation Simultanee” Hildegund Buler “Conference Interpreting: A Multichannel Communication Phenomenon” (会議通訳：多重チャンネル伝達現象 1985)
- P.A. Jensen “SI: A Note on Error Typologies and Possibility of Gaining Insight in Mental Process” (メモや誤りの類型学とメンタルプロセスにおける洞察力獲得の可能性 1985)

2. 教育的領域における通訳

2-1. 通訳者養成コースのある主な大学

「大学、大学院における実態調査」(染谷等 2005) によると平成17年の時点での日本の大学726校のうち、ホームページを開設している大学のサイトから通訳関連の授業を設置している大学を絞り込んだ場合、その数は最終的に105校としている。ホームページに通訳関連の授業

を提示している大学に限定されており、実際に通訳教育を外国語教育のカリキュラムに取り入れている大学の数はそれ以上であると推定されるが、その105の大学で139の通訳関連コースが設定されているとしている。では、どのような大学、大学院なのか、実際に通訳コースを設定している大学・大学院として主に以下が挙げられる。

青山学院大学
上智大学
国際基督教大学 (ICC)
清泉女子大学
立教大学
東海大学
東京外国語大学 国際コミュニケーション
通訳コース
明海大学 外国語学部、英米語学課、通訳・翻訳コース
津田塾大学 「通訳コース」「翻訳コース」(副専攻)
国際教養大学専門職大学院
大東文化大学 大学院 通訳翻訳研究科
立教大学大学院、異文化コミュニケーション研究科
会議通訳法研究、通訳翻訳研究
東京外国語大学大学院 地域文化研究家・応用言語専攻 通訳専修コース
明治大学 博士前期 翻訳・通訳プログラム
目白大学大学院 通訳研究・通訳実習
神戸女学院大学大学院 英文学専攻 通訳翻訳コース

フランツ・ポエヒハッカー (2004) によれば1970年代から1980年代の通訳者養成プログラムは高等教育の学術的な側面ではなく職業訓練が中心であったとされる。マッキントッシュ (Mackintosh, 1999) の「理論を取り入れたカリキュラム」が多くの養成機関で主流となったのは1980年代以降であり、CIUTI (翻訳者通訳者養成のための大学機関協議会) は、通訳者教育を学術的な研究と職業的な完成という2重の側面を強調するようになった。海外での留学を通して通訳者としての力量を高めることを勧める英語教育関連の雑誌もあるが、海外において通訳者養成で知られる主な大学・大学院を挙げると以下の通りである。

フランス：パリ第三大学 ESIT
アメリカ：ジョージタウン大学、モントレイ国際大学大学院
オーストラリア：クィーンズランド大学大学院
マコーリー大学大学院
モナシュ大学大学院、RMIT大学
イギリス：ニューキャッスル大学、バース大学

中国：上海外国語大学
ロシア：モスクワ国立大学
台湾：台湾師範大学 輔仁大学

津田守 (2007) は「世界の大学及び大学院における通訳翻訳教育、トレーニング、研究についての調査・比較研究」報告書で以下の大学及び大学院をカバーしている。

中国：北京語言大学 香港中文大学 香港大学專業進修学院 上海外国語大学
オーストラリア：王立メルボルン工科大学 モナシュ大学
ドイツ：ハイデルベルク大学 マインツ大学
ザールランド大学 デュッセルドルフ大学
フランス：パリ第三大学
イギリス：ヘリオットワット大学
ペルー共和国：聖心女子大学、リカルド・パルマ大学
メキシコ：Institute スペリオール・デ・インテルプレテス・イ・トラドゥクトーレス
アメリカ：カリフォルニア大学、カルフォルニア州立大学 チャールストン大学大学院
タイ：国立ヂュラーロンコーン大学
インド：ハイデラバード大学
ロシア：モスクワ国立言語大学、サンクトペテルブルグ大学
スペイン：マドレット自治大学、アルカラ・デ・エナレス大学 バルセロナ自治大学

通訳者養成の大学・大学院の中で、よく筆者が目にするのはフランスのパリ第三大学とアメリカのモントレイ国際大学大学院である。モントレイ国際大学大学院には沖縄県の人材育成財団からも通訳を学ぶための留学生 (筆者の友人) が出ている。

2-2. 通訳者養成クラスの語学レベル

通訳者としての語学力レベルに関して、染谷 (2001) は一般に日本の通訳者養成機関が入学の最低基準としているのは英検準1級、又はTOEIC800点前後以上であり、少なくとも受信語彙1万語以上で、TIME や NEWS WEEK の平均的な英文を140wpm 程度のスピードで読み、CNN などのニュースを困難無く聞き取れる程度を、通訳訓練の前提となる語学力レベルとして定義している。実際に筆者が2001年から2002年までの1年間学んだことのあるインタースクール (1966年設立) を例にとると、会議通訳コースでは入門科においてTOEFL550点、TOEIC800点、英検準1級以上、基礎科IにおいてTOEFL600点、TOEIC900点以上が要求されており、基礎科IIでは、英検1級以上、本科ではTOEIC950点以上が要求された。筆者の基礎科クラスIは英検1級以上が平均的でTOEIC960点を取得している者もいた。全国の通訳コー

表1. 通訳専門機関における入学者レベル

専門機関名	コース名	入学者レベル
インタースクール	会議通訳（入門・基礎科）	英検準1級以上 TOEIC850点以上
NHK 情報ネットワーク	通訳英語コース	TOEFL620点以上
	同時通訳コース I II III	TOEFL640点以上
コミュニケーターズ	通訳者養成コース	初級：英検2級 上級：準1級
	プロ通訳者養成コース	英検1級以上 TOEIC930点以上
コングレ Institute	英語通訳コース	英検準1級以上
サイマル・アカデミー	通訳者養成コース	英検1級以上
アイ・エス・エス	英語通訳ビジネス通訳	英検準1級以上TOEFL530点 TOEIC800点以上
	英語通訳コース	英検1級以上TOEFL630～650点 TOEIC950～970点

出典：イカロスムック「通訳&通訳ガイドの仕事」P146～167

を提供している主な専門機関での入学者レベルを上げてみると以下の通りになる。

上記の通訳者養成の専門機関における入学者レベルを考えると、通訳者養成のための本格的コースは大学院レベルではないかという印象を受ける。実際、小松（2005）も、通訳者養成を目的とする訓練における英語力レベルは TOEIC900点以上であるとし、学部での通訳訓練法の授業では3年次以上、TOEIC500以上を対象とすべきであると述べている。又、我が国の大学生の平均 TOEIC得点およそ450～480点を考慮に入れると大学における通訳関連プログラムは、英語力の向上に主眼を置くのが自然であるとし、その上で通訳者養成を主要目的とする大学院レベルのプログラムを立ち上げ、入学に必要な高い基準を定めて学生を選抜することを提言している。つまり、語学力向上を目的とした学部レベルの通訳教育と、通訳者養成を目的とした大学院レベルの通訳教育の両方が大学における通訳教育であると言える。

2-3. 日本の通訳教育の現状

染谷（1996）は、現在の日本の大学における通訳・翻訳教育は圧倒的に言語面に比重が置かれ、外国語教育の一環として位置づけられていることが多いと述べている。

稲生、染谷（2005）は、「大学で通訳の授業を受ける学生は将来プロを目指すとして定めている者は殆ど無く、多くは英語が好き、語学力を伸ばしたい、面白そう、あるいは漠然と通訳に興味があるということで受講しているため、授業内容もこれを反映している。P.95」としている。筆者の担当する通訳クラスにもそれはそのまま当てはまる。語学力向上だけでも成果であるが、受講後に通訳に興味をもち将来の職業選択の一つに加えてもらえれば教師にとっては思わぬ副産物ということになる。稲生、染谷は学部レベルでは、通訳の授業の目標は、通訳訓練

手法を用いた高度な言語運用能力の養成を核に、国際社会で活躍するために必要な異文化コミュニケーション能力を備えた人材を育てることにすべきであるとする。つまり、語学力強化と異文化コミュニケーション力の養成の2つを目標にするということである。確かに通訳者としての入口における語学力レベルの高さを考慮すれば、学部レベルではそうならざるを得ないだろう。

2-3-1. 担当教員とクラスサイズ

前出の「大学、大学院における実態調査」（染谷、斉藤、鶴田、田中、稲生 2005）によれば大学における通訳教育の担当教員は40代～50代が最も多い。比較的新しい分野に関わらず担当教員の年齢が高いのは、単に語学力のみならず、通訳者としての実務経験の重視によると分析されている。又、男女比は女性64%、男性36%で、平成16年度の大学教員の男女比、女性16%、男性84%を考えると非常に高く通訳分野における女性優位を示すものと説明されている。

染谷らの調査でクラス別の平均学生数は20名以下のサイズが全体の60%を占めているように、筆者自身が担当する通訳クラスもほぼ10～20名で推移している。これは一人一人の実習やプレゼンテーションが多いクラス内容から適切なサイズと言える。

2-3-2. 教育目標と内容

筆者の場合、教育目標は通訳技術を利用した「語学力の強化」に置いており、できれば授業を通して通訳に興味・関心をもってもらい将来の職業としても選択する学生が出てきて欲しいとの希望をこめて授業を行っている。これは前に述べた通訳者養成の入口での語学力レベルとクラスを受講する学生の語学力レベルを考慮した上での教育目標である。大学・大学院における通訳の教育目標について、染谷ら（2005）では、語学力強化（38%）通

訳者の養成 (23%) 異文化コミュニケーション (18%) 一般教養・学問 (18%) となっており、筆者のクラスの目標は全国の多くの通訳クラスの目標を共有するものとなっている。

授業は後期のみ (2単位) の提供で専門教育科目であるため対象は3年次以上となっている。成績は毎回の語彙テストと期末テストにおける筆記試験と口頭試験、そして授業での通訳の実践内容の合計点で評価される。授業内容は大きく分けると各通訳技術を利用した語学強化のためのタスク (練習) と通訳そのものの実践である。実践ではペアーを組ませ、一人が日本語のスピーチを書いてきてスピーチをし、それを他方が英語に通訳、一人が英語のスピーチを書いてきてスピーチしそれを他方が日本語に通訳というスピーチでも通訳でも日英、そして英日両方を実践を通して経験できるようにしている。発表後に各自が発表者の通訳についてコメントし、最後に教師 (筆者) がコメントしてまとめる。同じ同僚 (ここではクラスメート) からフィードバックをもらうこの方法はフランスのパリ第三大学でも行っているやり方だと知り、(鶴田、内藤2010) 多いに勇気づけられた。授業で紹介する技術は、クイック・リスボンや一語遅れ二語遅れのラギング、シャドーイング、リプロダクション、区切り聞き、スラッシュ・リーディング、サイト・

トランスレーション、ノート・テーキング、サマライジングであり実践として主に逐次通訳を行い、時間的余裕がある場合に同時通訳を経験させる。同時通訳は機器の必要性や学生の語学力レベルの問題もあり、なるべく経験させたいものの実施は困難な状況と言える。後期のみを開講となっており逐時通訳で基礎力を鍛えた上で、同時通訳に発展される時間的ゆとりも無いことも学生に同時通訳までを経験させることが困難な原因となっている。瀧沢 (2002) は通訳養成技術を目的別に「語学強化」と「通訳技術取得」として、以下のように2分化している。

「語学力の向上」を目標としている筆者のクラスであるが、瀧沢の表を参照すると、そのすべてをカバーしつつ瀧沢の表に登場しないサマライゼーションまでを行っており、授業内容としては欲張っているといえなくもないが、前述したように通訳の授業が学期に1回しかないためこのような大盛りの内容にせざるを得ない。紹介される技術が多岐に及ぶ分、練習や実践の数が限定されており、できるなら前期で集中的に語学強化のためのタスクを行い、後期に通訳技術を利用した実践を増やしてさらなる向上を目指すような構成にしたいものである。語学力向上を目指した後期のみ授業であるものの、その後の就職で生かされる場合もあるようで、基地内に就職した学生から「通訳をさせられることも多く、通訳の

表2. 通訳の授業における目的と方法

語学強化	通訳技術取得
シャドーイング	サイト・トランスレーション
リプロダクション	ノート・テーキング
区切り聞き	逐次通訳
スラッシュ・リーディング	同時通訳

瀧沢 (2002)

表3. 筆者の通訳クラスでの使用教材

書名	著者	発行者・発行年	主な使用目的
通訳の技術	小松 達也	研究社2005年	リスニング&ノート・テーキング
グローバル時代の通訳	水野 真紀子 中村 眞佐男 鍵村 和子 長尾 ひろみ	三修社 2002年	ラギング リプロダクション
中学英語で通訳ができる	丸山 祥夫 向 鎌治郎	ジャパントイズム 2000年	逐次通訳・同時通訳
ウィスパリング同時通訳	柴田 バネッサ	南雲堂 2005年	クイック・リスボン (数字) 区切り聞き 頭ごなし訳
英会話コーバズドリル	投野 由起夫	(株)アルク 2007年	単語力増強 (ビジネス用語)
英語リスニングの基礎トレ	田中 深雪	講談社 2004年	サマライゼーション (基礎)
CNN English Express		朝日出版 (月刊)	区切り聞き サイト・トランスレーション サマライゼーション (応用)

授業を取っていて良かった。」との感謝の電話をもらったことがある。語学力強化を目指しつつ、通訳者養成のための入口に限りなく近づくことを目標にしたい。

2-3-3. 教材

教材に関しては、筆者の場合は学習者の語学レベルに対応できるよう様々な教材を準備して紹介する技術に応じて使い分けている。主なものを以下で紹介する。

上記に挙げた教材の中のCNN English Express (月刊) は市販の英語学習教材であり筆者は特に上級英語学習者用 (準1級以上を目指す者) であると考えているが、手元にある資料では2004年頃から巻頭記事で「最強のリスニング学習法」を提供し始め、それは今日まで継続されている。そのサブタイトルは「プロの通訳者養成で効果が実証!」とあり、監修は筆者がインタースクールで学んだことのあるインタースクール講師でプロの通訳者、柘原誠子氏で、内容は区切り聞きとサイト・トランスレーションである。柘原 (2001) もそれ以前 (1999年～) のCNN English Express での彼女のコラム「通訳の現場から」をまとめたものであり、日本において、通訳の技術が一般の英語学習者の学習手段として脚光を浴びてきた時期が垣間見える。

異文化コミュニケーション力を養成するための教材は、語学力強化の教材に比べて少ないが、実際の通訳例を自主教材として利用できると良いだろう。ランデル洋子 (2003) は観光通訳の現場を例に取り、日本人の立場や外国人の立場から見たカルチャーショックの事例 (集合時間に集まらない外国人達にいらつく日本人、ナイフ・フォークが準備されていないことに心配する外国人、tea を頼んだのに sugar が無いことに気づく外国人など) を挙げ、それぞれの認識・理解の過程を得てどのような対処法があるかを提示しているが、このような記事を異文化コミュニケーション力養成のクラスで自主教材として取り入れていくことも可能である。

2-4. 通訳者養成のための技術一目的・効果

大学における通訳の授業において「語学力の向上」と「通訳者養成」の両目標のもと紹介されている、主な通訳者養成のための技術の目的とその効果について以下に述べる。

1) クイック・レスポンス (Quick Response)

クイック・レスポンスとは聞いた単語や語句をすぐに訳出することで、目的は即時訳出と語彙力増強である。テープやCDから流れる日本語や英語を即時訳出していくことで、柴田 (1998) が言うところの「英語と日本語を同時に一語として覚える」練習をする。訳出の速さに繋がる練習である。本文に入る前の単語の

予習や授業のウォーミング・アップ活動として適している。学生にとって自身の語彙力チェックにもなり、楽しんで気楽にやれるため好評な練習である。しかしながら、染谷 (1996) はこの語句のクイック・レスポンスに異議を唱えており、言葉に対する反応力 (agility) を鍛える目的で行われるものの、通訳者にとって重要なことはコンテキストに応じて柔軟に訳語を生成する能力であり通訳の本質に逆行する訓練であると言わざるを得ないとしている。確かに語彙の意味は一つではないし、コンテキストに応じて訳も変わっていかねばならない。同じような批判から語彙の意味を調べるのに英日ではなく英英辞典を薦めるという動きもある。その主張の意味するものを理解した上で、筆者はやはり日本人英語学習者にとって英日辞典の使用が先だと考えるし、語彙のクイック・レスポンスも基礎力養成には必要であると考えている。英語の意味を英語で捉えたところでそれを的確に日本語で表現できるとは限らないし、頭の中で意味を捉えていても日本語が出てこない時点で理解しているとは相手に認めてもらえないからである。語彙のクイック・レスポンスと共に筆者がお勧めしたいのは数字の即時変換で、数字の英語での読みかえの練習にもなり学生もゲーム感覚で楽しんで行っている。

2) シャドーイング (Shadowing)

シャドーイングとは、英語あるいは日本語のオリジナルなスピーチを影 (shadow) のように追いかけて再現 (リピート) していく練習で、「耳と口の分化を可能にする練習として同時通訳の基礎訓練の位置づけで世界の通訳養成機関で長年採用されてきた (瀧沢、2002 p.64)」技術である。数ある通訳技術の中でも学校教育においてよく知られよく利用されている技術であろう。高山 (2008) も「学校英語教育においてシャドーイング指導実践の数は増加傾向にあり高校 (田辺2006; 山崎、2006) や大学 (佐々木、白木、2007; 山田、2007)、のみならず中学 (中島2002, 小金沢2003) も報告されている」と述べている。

小松 (2005) はシャドーイングの同時通訳に対する効果については未だ結論は出ていないとし、セレスコピッチなど意味の理論 (IT) 派はSLテキストを分析して「センス (大意)」を捉えるという通訳の基本的な目的に反するとしてシャドーイングの意義を認めていないと紹介している。小松自身は「音声的訓練としてもリスニングの練習としても有効だと考えられているが、正しく声を出しながら聞いて理解する方にも注意を払うことによって、『聞きながら話す』という同時通訳の予備訓練としても意義があるとしている²⁾。染谷 (1996) はシャドーイングは同時通訳の周縁的な

能力の訓練にはなるが、本質的には通訳とは殆ど関係のない訓練項目であるとするが、音の認知とその再生が連続的にできるような耳と口を同時に使うという点でプロソディー強化訓練には有効であるとしている。

筆者は特にシャドーイングの音声的訓練としての意義を感じており、イントネーション、アクセント、発音、音の連結や弱化、吸収、間の取り方などのプロソディをそのまま真似るため、モデル音声ネイティブであればネイティブが話すような英語に近づける近道であると考え。実際、通訳のワークショップで英語のシャドーイングを長時間行った後の筆者の英語を聞いた家人から「前より外人っぽい」との評をもらった経験がある。又、英語だけでなく日本語の、例えばNHKのアナウンサーの日本語をまねるシャドーイングも、きちんとした日本語の発声に重要であるため筆者の授業では日本語のシャドーイングも行う。瀧沢(2002)は英語によるシャドーイングのメリットとして以下を挙げるが、被訓練者 (trainee) としての筆者の経験上、実際シャドーイングを行うと①から⑤までをメリットとして実感し納得することができる。

- ① プロソディーの向上
- ② 自分の聞き取れない箇所がわかる。
- ③ 集中力の養成
- ④ 短時間の練習で多量の英文を練習できる。
- ⑤ 英語の自然な発声速度についていけるようになる。

3) リプロダクション (Reproduction)

リプロダクションは聞こえてくる英文や日本語をシャドーイングのように音声に重ねることなく、いったんフレーズや文を終了させてから、できるだけ正確に再現する練習である。瀧沢(2002)はそのメリットを「インプット、アウトプットを連結して行うことからリスニング力を伸ばすだけでなく、スピーキング力向上に役立つp.66」とする。染谷(1996)は、この訓練は発話の「内容」よりも、その表面的な「形態」の記憶と再現に重点を置いた訓練であるという意味で、通訳の本質から離れた作業であると評しており、通訳では発話の表層構造にとらわれることなく、いかにその意味内容を的確につかむかということが重要であると言う。

実際に自身が行い、又、学生にもさせてみてわかったことは、リプロダクションの場合はシャドーイングと異なり、文章になると構文を理解していなければ再生が困難であるということだ。その聞いた構文と全く同じ構文を再現させる作業に対し、染谷は異議を唱えているのである。その主張は理解できる訳だが、しかしながら、染谷の言う「言葉から離れる」作業、つまり同じ意味内容を異なる構造で伝える作業は、このリ

プロダクションの基礎的練習をした上で行っても良いのではないかと筆者は考える。リプロダクションに短期記憶力の向上と共に、構文理解を促進するというメリットも挙げることができるのではないかと考えるのである。実際、筆者が授業実践を通して感じることは、シャドーイングに比べ、再現する時間的ラグがあるため記憶力が衰える年長者ほど難しい練習であり、又、構文理解を伴うため英語力が低い学生ほど難しい練習であるということがあり、その意味で通訳者養成前の基礎練習に位置づけてもよいと思うのである。

4) スラッシュ・リーディング (Slash reading)

意味のかたまりでスラッシュを入れて、前倒し訳で読んでいく方法であり、高校の授業でも読解の技術として紹介される。自然な訳文という点では、これまで教えられてきた日本語のシンタックスに合わせる「返り読み」が適しているが、この方法はトップダウン処理であるため読みの速度や理解が向上するということが主なメリットとして考えられる。通訳技術のサイト・トランスレーションに繋がる練習である。理論上、又、スラッシュ・リーディングを教えてきた経験上からも、スラッシュを入れる間隔が広いほどその人の英語力は高いと言える。

5) 区切り聞き

テープやCDの音声の意味のかたまりでポーズをつけられており、そのポーズ内で目標言語に訳していく。原文の語順通りに情報を処理していくということから、筆者は、この練習はスラッシュ・リーディングをリスニング活動に置き換えたものと理解している。瀧沢(2002)は聞き取った英文を瞬時に理解する力を高める練習であると紹介しており、柴田(1997)はその目的を聴解力強化と即時訳出としており、その意味では同時通訳の練習となる。スラッシュ・リーディングも区切り聞きも長文ではないため、英語学習の基礎力を養成する練習として効果的であり、比較的英語力の低い学生には有効だと筆者は考える。又、retention(記憶保持能力)の衰えがちな年配者にも有効だろう。実際、柘原(2001)は聞いた内容をすぐに忘れてしまうという悩みを持つ50代の男性に区切り聞きを日課として勧め、彼のretentionが大幅に向上したというエピソードを紹介している。

6) ノート・テーキング (Note taking)

記憶力の限界を補うためのメモ取りであるが、それに集中しすぎると聞き取りへの集中力が阻害されるという体験を筆者自身が何回か体験していることもあり、できるだけ大事なものを記録することが肝要であ

ると考える。時間節約のために記号や図を利用することが多い。小松 (2005) は語学力向上の観点から、ノート・テーキングは「聞いたことの内容を理解し、分析・整理して再表現に備える。英語を話すためには、話そうとすることの内容が頭の中で整理されている必要がある。ノート・テーキングは表現する前のコンセプトの整理に役立つと考えられると述べる³⁾。

筆者の考える教育上のメリットとしては、大切なものを抜き出すという点で、要約力の向上をまず挙げたいところだ。又、記録したメモをもとに文章を再構築しなければならず、表現力の向上も考えられる。最終的にノート・テーキングの練習はそのままリスニングの練習でもある。ノート・テーキングの初期段階として、数字のクイック・レスポンスを行った後、ニュースを聞いてその中の数字を書き取らせていく作業などが有効であると考え。又、ニュースの必須情報である 5 W 1 H (Who, When, Where, What, Why, How) を書き取らせる作業なども、ノート・テーキングとともにサマライゼーションの作業となり、要約力養成にも繋がる。

7) サマライゼーション (Summarization)

サマライゼーションとは大意要約のことである。最近「要約力」という本も出版され要約する力の大切さが言われている。サマライゼーションは時間制限などによって要約通訳が必要な時に力を発揮する。語学力一般においても、文章を要約する、聞いた内容を要約する、自身のスピーチや発表内容を要約するなど、あらゆる場面において要約力は必要となる。話し手が何を言いたいのか、そのメッセージを的確につかまなければならないことから、いわゆる K.Y (空気が読めない) という現象も要約力の不足に起因していると言えるのではないかと筆者なりに解釈している。筆者の授業では、初期段階としてニュースや新聞記事を使用している日本語、英語による要約練習を行い、次の段階でスピーチなどの要約に入る。ニュースや新聞記事が初期段階での教材に適しているのは、5 W 1 H の要素をつかむことによって内容を容易に要約できるからである。

3. 課題と将来性

3-1. 学術的領域

フランツ (2004) は通訳学会の規模の小ささや研究が質、量、共に十分な水準に達していないとのジルの指摘 (Gile, 1998 ; 2000) を取り上げている。しかしながら、21世紀における通訳学の展望に関しては明るいとし、その理由として共通語としての英語やコミュニケーション

の手段の電子化による大量の情報アクセスが可能となり、研究者間の協力、交流も促進されていること、通訳専門の学術誌や通訳学に関する刊行物、通訳者養成のための教科書の出版などを挙げている。通訳学がグローバル化や技術の進歩のような「メガトレンド」に影響され、又、科学研究におけるポストモダンに晒され、社会科学や質的研究法へと転換する可能性を指摘しているのである。Davidson (1992) は日本で会議通訳や通訳訓練について記述的あるいは科学的な分野において研究されるべきことはまだまだ多いとし、それぞれの分野での研究テーマとして、以下のような例を挙げている。

記述的研究テーマ

- ・フリーランス通訳と通訳専門機関
 - ・通訳専門機関と ALLC の役割
 - ・日本の通訳者訓練の現状
 - ・通訳の種類：会議通訳・法廷通訳・コミュニケーション通訳・通信通訳など
 - ・日本における外国人通訳者の役割
 - ・日本人通訳者の言語コンビネーション
- #### 科学的研究テーマ
- ・将来の会議通訳者養成における大学の果たすべき役割
 - ・日本の通訳者の言語コンビネーションの能力測定方法
 - ・日本人通訳者の訓練方法 (日本人のための特別カリキュラムの必要性、欧米メソッドの導入の仕方)
 - ・日本における法廷通訳の現状、法廷通訳者の (資格) 基準
 - ・日本におけるコミュニティ通訳の必要性とありようについて
 - ・言語面 (日本語へ訳す際のレジスター、同音異義語と日本語語順の特異性、ユーモアの訳仕方、日本語美辞麗句、専門用語の通訳など)

(Davidson, 1992)

Davidson によって挙げられた上記のテーマを見ても、通訳研究はこれから継続してなされなければならない、開発されるべきテーマは多岐に及ぶ。上記には挙げられていないが2011年の日本国際文化学会第10回全国大会の発表にも見られた異文化コミュニケーションの分野の研究も、これから増加してくるものと筆者は考える。グローバル化が進む中、国際会議は頻繁に開催されており通訳研究のテーマに頻出する会議通訳や同時通訳の需要はまだ高く、又、コミュニティ通訳の場も増加している。このような状況下、通訳技術の英語教育への応用も盛んになっており、通訳研究の成果が英語教育へ及ぼす影響力も大きく、さらなる研究発展の可能性は高い。

3-2. 教育的領域

大学や大学院における通訳教育の課題としてまず入口の問題として、学生の語学力レベルが挙げられるだろう。通訳者養成のための本格的通訳教育は最低でも準1級以上ということがあり、これまで述べてきたように学部においては通訳者養成ではなく、語学力強化に重点が置かれている。「大学、大学院における実態調査」(染谷、斉藤、鶴田、田中、稲生 2005) は、「通訳コースでありながら、その主たる教育目標を通訳スキルの修得、ないし通訳者養成以外にしていると答えた回答者が全体の77%を占めることは、現在の我が国の大学における通訳教育の現状及び問題点をよく反映している (p. 296)」と述べている。大学や大学院における通訳教育は学生の語学力レベルによって、どこまで通訳者養成のためのクラスに近づけるのかが左右されとも言える。実際、筆者が行っているクラスも語学力強化に重点を置いた通訳教育であり、語学力強化のための通訳教育を決して否定するものではないが、大学における専門教育レベルを考えた場合、それを基礎として次の段階の教育目標が設定されたクラスがもっと増加しても良いのではないかと考える。鳥飼 (1997) も、考慮すべきは通訳者養成の将来についてであるとし、大学・大学院レベルでの通訳者養成のあり方、及び存在意義はどこにあるのか、基礎力が不足している学生が増加するであろう今後の事態にどう対応するのか、そのような学生をどう教育するのかという課題を挙げている。

もう一つ、課題として挙げておきたいのは、異文化コミュニケーションの視点に立った通訳教育の導入である。稲生、染谷 (2005) は「通訳教育が訓練法を活用し語学力を高める点に主眼が置かれているが、今後は語学力に加えて異文化の橋渡し役も務められる能力を備えた人材を育てる事を目標にすべきである。(p.98)」と、その必要性を説いている。通訳授業の中に語学力強化だけでなく異文化理解教育を取り入れるゆとりを持ちたい。その養成は語学力強化の次にくる二次的なものとして筆者は捉えているものの、異文化コミュニケーション力はコミュニケーション上欠かせないものであることも確かである。

さて通訳教育の将来性についてであるが、鳥飼 (1997) はコミュニケーション能力に焦点を当てた現在の英語教育を支援する上での通訳の果たす役割の可能性について詳細に言及する。「トップダウン式情報処理」が強調される最近の英語教授法だが、それは過去現在において通訳界で行われてきた手法であり、その手法を応用したリスニング・ストラテジーで未知の単語への対処法や全体像をつかむ聞き方が学べるとする。又、玉井健 (1997) の実験結果として「シャドーイングは高校生、大学生レベルの学習者に対し聴解力を向上させる有効な指導法である」を挙げ、シャドーイングの聴解力伸長効

果を支持している。アウトプットスキルでは、基礎的通訳訓練の手法であるパラフレーズ、サマライゼーション、リプロダクションが英語の表現力育成に寄与する手法であることを指摘する。さらに、1970年代後半から全盛時代に入り現在に至っている“fluency rather than accuracy” (正確さよりも流暢さ) がモットーのコミュニケーション・アプローチの弱点を補う役割を果たすとして、例えば、通訳訓練の手法による語彙力増強、プロソディー感覚の向上などを挙げ、最近よく耳にするようになった Critical Thinking (批判的思考力) に関しても、分析的に理解する通訳方式は役に立つとしている。

小松 (2011) は L1 の使用と文法規則の明示的揭示を極力避ける Direct Method (V. Cook, 2001 ; G. Cook ; 2010) を中心とした従来の英語学習は、より高いコミュニケーション能力には不十分であるとし、通訳がより効果的な英語学習に貢献できる要素として「正しい理解」と「明瞭な表現」の2要素を挙げている。又、内藤 (2011) は関西地域の国際関係部門を持つ企業へのアンケート調査から、企業の多くが「高い英語の実用的運用能力」を求めているという結果を示し、通訳訓練は実務性 (社会性)、総合性 (包括性)、すでに持っている知識の応用などの要素から企業が学生に期待する国際コミュニケーション能力の強化に資する、高校までの英語の基礎教育と社会人としてのニーズとのギャップを埋めるものであるとしている。興味深いのは篠塚 (2009) の発表で、大学生を対象に文法訳読法と通訳訓練法における TOEIC スコアの伸び率を比較した結果、通訳訓練法がより伸び率が高いことがわかったとしているが、その理由としてシャドーイングとスラッシュ・リーディングの多重処理タスクによる脳の活性化度の高さを挙げている。

課題として挙げられた通訳教育における異文化コミュニケーション力の養成であるが、課題であるとともに、開発されるべき分野として将来性が高いと言い換えることも可能であると筆者は考える。異文化コミュニケーションに関わる実際の通訳例を教材にして、異文化を学習していくタスクなど、異文化コミュニケーション力養成のための教育現場に、生きた教材として通訳例を活用していくと学生の興味・関心も喚起されるだろう。研究分野における本テーマの増加は教育分野へも波及していくことと思われる。

このように通訳教育の英語教育への貢献度の高さや課題は、同時に通訳教育の明るい将来性を示すものである。「語学力強化」や「異文化コミュニケーション」の視点に立った通訳教育の将来性は明るいと筆者自身が断言できるのは、通訳技術の語学力強化に及ぼす効果の高さを15年に及ぶ通訳の勉強を通して身をもって経験しており、又、通訳の実践を通して学ぶ異文化コミュニケーション

の教育はまさに机上の論ではなく、そこには実践的であることから学ぶ楽しさが存在すると考えるからである。通訳者養成のための専門的通訳教育についても、グローバル化とともに、ビジネスの場での企業通訳や政治や国際社会問題解決のための会議通訳は増えていることから、その必要性は高まっているといえる。専門技術や学術研究の共有のための会議通訳においても、その専門性の高まり、専門分野の協働体制や交流域の広がりと共に、通訳者の需要は高い。又、進出分野として法廷通訳やコミュニティ通訳など通訳の場は広がり、その需要は益々高まっている。日本が国際社会の中で活躍する機会が増加すればするほど、通訳者養成のための通訳教育の将来性も高まっていくものとする。

引用文献

- イカロスムック (2005). 「通訳&通訳ガイドの仕事」
東京：イカロス出版
- 稲生 衣代、染谷 泰正 (2005). 「異文化コミュニケーションの視点に立った通訳教育のための試論」
Interpretation Studies, No. 5
- 小金沢宏寿 (2003). 「リスニング力アップのためのシャドーイング活動」『英語教育』(9月号). 52, 14-16
- 小松 達也 (2005). 「通訳の技術」研究社
- 小松 達也 (2005). 「大学・大学院意における通訳関連プログラムのあり方」日本通訳学会 第6回年次大会におけるシンポジウム基調講演要旨
- 小松 達也 (2011). 「通訳と英語学習—英語教育への貢献を目指して」第12回通訳翻訳学会年次大会発表要旨
- 近藤 正臣 (1994). 「日本における通訳研究」『月刊言語』26巻9号 pp.20~27 大修館書房
- 佐々木緑、白木智士 (2007). 「シャドーイングの発音練習への応用」『コミュニケーション研究』5, 1-20
- CNN English Express (2004). 「最強のリスニング学習法」朝日出版 7月号
- 全国英語教育学会 (Japan Society of English Language Education)
<http://www.jasele.com/> (2011年11月現在)
- 全国語学教育学会 (Japan Association For Language Teachers)
<http://www.jalt.org/> (2011年11月現在)
- 大学英語教育学会 (The Japan Association of College English Teachers)
<http://www.jacet.org/> (2011年11月現在)
- 日本国際文化学会 (The Japan Society for Intercultural Studies)
<http://www.jsics.org/> (2011年11月現在)
- 日本通訳学会 第8回年次大会 報告
<http://www.socnii.ac.jp/jais/Kaishi2007/pdf/27-taikaihokoku.pdf#search>
- 日本通訳翻訳学会 (The Japan Association for Interpretation Studies)
<http://www.socnii.ac.jp/jais> (2011年11月現在)
- 篠塚 勝正 (2009). 「文法訳読法と通訳訓練法におけるTOEIC スコアの伸び率およびその脳言語科学的考察」
日本通訳本学会第10回年次大会 発表
- 柴田 バネッサ (1997). 「はじめてのウィスパリング同時通訳」南雲堂
- 柴田 バネッサ (1998). 「実践ゼミ ウィスパリング同時通訳」南雲堂
- 染谷 泰正 (1996). 「通訳訓練法手法とその一般語学学習への応用について」
『通訳理論研究』第11号 (第6巻2号)
- 染谷 泰正 (1996). 「日本における通訳者訓練の問題点と通訳訓練に必要な語学力の基準」通訳理論研究 第6巻1号 pp.46-58.
- 染谷 泰正 (2001). 「通訳教育のあり方—何を教えるか、何を学ぶか」通訳翻訳ジャーナル pp. 98-99.
- 染谷、斎藤、鶴田、田中、稲生 (2005). 「我が国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」
Interpretation Studies, No. 5,
- 高山 芳樹 (2008). 「シャドーイングスキルと聴解力読解力との関係を探る。金谷憲教授還暦記念論文集刊行委員会編『英語教育・英語学習研究現在型リサーチと実践へのアプローチ』 東京：桐原書店 79-80.
- 瀧沢 政巳 (2002). 「語学力強化法としての通訳訓練法とその応用例」北陸大学紀要 第26号pp. 63-77.
- 玉井 健 (2005). 「シャドーイングの効果に関する研究」風間書房「通訳研究」アーカイブ
http://www.socnii.ac.jp/jais/Kaishi_Archive/index.html (2011年11月現在)
- 通訳者・翻訳者になる本 (2003). イカロス出版
- 柘原 誠子 (2001). 「通訳の現場から」朝日出版社
- 田辺 尚子 (2006). 「入門期で黄金の時期：自立的学習者を育てるには」『英語教育』(8月号別冊 55.6-10)
- 津田 守 (2007). 「世界の大学・大学院における通訳翻訳学プログラム」平成18年特別研究費Ⅱ：「世界の大学及び大学院における通訳翻訳教育、トレーニング、研究についての調査・比較研究」報告書 大阪外国語大学
- 鶴田和佳子・内藤稔 (2010). 「通訳者養成における実習指導のあり方」東京外国語大学論集 第8号
- 鳥飼久美子 (1997). 「日本における通訳者教育の可能性—英語教育の動向をふまえて」『通訳理論研究』第13号
- 鳥飼久美子 (2007). 「通訳者と戦後日本外交」みすず書房

内藤 能 (2011). 「大学学部生対象の通訳授業の意義」
第12回通訳翻訳学会年次大会での発表要旨
日本通訳学会 (2004). 「『通訳理論研究』論集」
『通訳理論研究』論集編集委員会
中嶋 洋一 (2002). 「学習集団を育てるための基礎トレーニング」三浦 孝・弘山貞夫, 中嶋洋一 (編) 『だから英語は教育なんだー心を育てる英語授業のアプローチ』東京: 研究社. 112-123.
フランツ・ポエヒハッカー (2004). 「通訳学入門」鳥飼久美子監修 みすず書房
山崎 陽子 (2006). 「継続は力なり: リスニング指導開花」『英語教育』(8月号別冊), 55, 49-53
山田 澄 (2007). 「オーセンティックな教材を用いたシャドーイングによる指導」望月昭彦, 久保田章, 磐崎弘貞, 卯城祐司 (編書) 『新しい英語教育のためにー理論と実践の接点を求めてー』東京: 成美堂. 165-177
ランデル洋子 (2003). 「異文化コミュニケーションクリニク」通訳翻訳ジャーナル 1月号 pp.82-83
Barik, H.C. (2002). “Simultaneous Interpretation Qualitative and Linguistic Data“ in Pochhacker and Shlesinger (eds) pp.79-91
Fukui, H and Asano T. (1961). *Eigo Tsuyaku no Jissai* Tokyo:kenkyuusha
Gerver, D. (2002). *The effects of Source Language Presentation Rate on the Performance of Simultaneous Conference Interpreters* in Pochhacker and Shlesinger (eds) pp.53-66.
Gerver and Sinaiko (1978). *Language Interpretation and Communication Proceedings of the NATO Symposium*
Gile, D. (1994). *Opening up Interpretation Studies* in Snell-Hornby et al (eds) pp.149-158.
Hickey, L. (Eds.) (1998). *The pragmatics of translation*. Clevedon, Philadelphia, Tronto, Sydney, Johannesburg: Multilingual Matters.
Mason, I. (Eds.) (2001). *Toradic exchanges: Studies in dialogue interpreting*. Manchester, UK & Northampton MA: St. Jerome.
Oleron, P. and Nanpan, H. (1965). “Recherches sur la traduction simultanee“
Journal de Psychologie Normale et Pathologique 62(1):73-94
Peter M. Davidson (1992). *Simultaneous Interpreting Research: Past, Present, and Future*. *Interpreting Research* No.3/vol.2 no.2
Pochhacker, F. (1998). *Unity in diversity: The case of interpreting studies*. In M.Cronin, L. Bowker, D.Kenny & J. Pearson (Eds.), *Unity in diversity?*

Current trends in translation studies pp. 169-176. Manchester, U.K.* St. Jreome.

Poyatos, F. (Eds.) (1997). *Nonverbal Communication and Translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins

注

- 1) 鳥飼久美子 (2007). 「通訳者と戦後日本外交」みすず書房 46頁
- 2) 小松 達也 (2005). 「通訳の技術」研究社 101頁 11~14行
- 3) 小松 達也 (2005). 同上 131頁 28行~132頁 3行